

日本代表に選出経験のある大学生トップアスリートの 飲酒動機に影響を与える要因に関する研究

スポーツ経営組織学ゼミナール 1316046 西山竜義

1. 研究動機・研究目的

「健康日本 21（第二次）」（厚生労働省, 2013）においてアルコールに対しての対策を掲げているが、アルコール中毒者数は年々増加している。東京消防庁（2019 年）のデータによると東京消防庁管内で発生したアルコール中毒搬送者数は、平成 26 年に計 14, 303 人から平成 30 年は計 17, 775 人に増加している。そして、年代別に見てみると、平成 30 年は 20 代が一番多く 8, 320 人であった。一つの理由として自分の適量が分からず、一気に飲みやコール等で無謀な飲酒をしてしまうことなどが考えられる。特に大学生による飲酒問題はメディアなどでも良く取り上げられている。過去の大学生の飲酒問題事例を見てみると、運動部やサークルの打ち上げでの飲酒が原因で飲酒死亡事故が起きていることが多いとわかる。この問題が原因で部活停止になった部活もある。このように、飲酒による問題行為が原因でその人を取り巻く人々や環境を変えてしまう恐れがある。そして、部活で問題を起こすことは、運動部活動に所属している選手として今後の人生に影響を及ぼす可能性がある。日本を代表する選手なら、尚更である。大学生トップアスリートの飲酒をする動機や飲酒による影響は未だ明らかになっていないため、動機や飲酒による影響を明らかにし飲酒による問題を未然に防ぐことが必要だと考え本研究に至った。本研究では、身体に気を遣う大学生トップアスリートと一般大学生では、飲酒との付き合い方は異なると仮定し、大学生トップアスリートが飲酒をする動機にはどのような影響要因があるのかを明らかにし、トップアスリートのお酒との付き合い方を明らかにすることを目的とした。

2. 研究方法

日本代表に選出経験のある 20 歳以上（平均年齢：21.4 歳）の大学生トップアスリート、男子 6 名、女子 4 名、計 10 名を対象にインタビュー調査を行なった。法律上のことを考慮し、20 歳以上のアスリートにインタビューを行なった。本研究では、半構造化インタビューを用いた。一人あたり、約 30 分程度の時間を要した。大学生トップアスリートが飲酒をする動機や飲酒することで生じる影響などがわかる質問項目をそれぞれに提示した。また、質問項目を作成する際には、飲酒理由尺度（桜井, 1997）の 6 因子に沿って作成した。また、一見無秩序に見える定性的データをグループにまとめ、グループ間の関係を図解化、文章化することにより、問題の本質を追及し新しい発想を得たりするために KJ 法を用いた。まず、インタビュー調査により得られたデータを書き起こし、逐語化した質的データのうち、事実確認による「はい」「いいえ」を除く、対象者から自発的に語られた言葉のみを分析の対象とした。出来上がった文字データをランダムに広げ、小ラベル作り、その後議論し中ラベル、大ラベルを作った。グループ編成後、表札の空間配置と図解化の手順による A 型図解を行なった。まずラベルを適切に配置し、関係性を記号で表し大学生トップアスリートの飲酒動機に影響を与えている要因の分類を図にし、ラベルの束を線で繋げたり、図として囲って結果を出した。

3. 結果と考察

大学生トップアスリートの飲酒動機に影響を与える要因は、①飲酒動機の要因、②飲酒から得られるもの、③アスリートとしての自覚、④飲酒阻害要因、⑤対処、⑥個人差の 6 つが存在することが明らかになった。また、大学生トップアスリートの飲酒動機の要因として、「コミュニケーション」「付き合い」「高揚」「酒好き」「褒美」から飲酒に繋がっていることがわかった。②いい気分尺度と⑥社交尺度の因子の量が多く出ており、大学生ト

トップアスリートと一般大学生の飲酒動機において、大きな差はないということがわかった。また、アスリート特有の飲酒動機因子である「褒美」に関しては普段アスリートとして、お酒から得られるマイナス面を避けるため、飲酒することを我慢していると考えられる。そのため、区切りがついたら飲むというような飲酒動機になっている。飲酒行為において、「立場の理解」「飲酒する際の身体への配慮」「飲酒するタイミング」は、アスリートとしての自覚として見られた。

本研究では、全ての対象者からアスリートの自覚とされる発言がされた。パフォーマンスに影響がでないように、飲む量やタイミングを練習前、試合前、シーズン中、シーズンオフで意識的に使い分けしている人が多かった。そして、トップアスリートは、飲酒をする際、身体への悪影響を回避はもちろんのこと、選手を取り巻く環境に対する迷惑がかかるのを気にしていることがわかった。また、トップアスリートは関わっている人達が多く、監督やチームメイト、そのスポーツの協会などが周囲には存在し、自分自身の体だけではないということが感じ取れた。「他の人とは違う」という自分の立場を理解して飲酒をしていると伺える。世間からのアスリートのイメージを気にしており、トップアスリートのレベルになると、世間からの認知度も非常に高くなってきている。いつ、どこで、どんな行動が見られているか分からない。また、情報が広がる可能性のあるSNSについて、トップアスリートは将来のことも考え、飲酒行為による問題を極力減らそうとリスクマネジメントをしていると考える。他にスポンサーから言われるなど、周囲からの規制が飲酒行為への影響に繋がっていると考える。アスリートを取り巻く人達も、アスリートの飲酒において特有の考え方を持っており、アスリートの競技人生を守るための対策であることが伺える。アスリートが自覚を持つのも周りからの影響があるのかもしれない。

一方、アスリートの飲酒の有効活用において、セカンドキャリアに向けて経営者とお酒を交えて話すことや、他に新しいスポンサーと関わるためにお酒を交え、今後の競技人生、競技後の人生の基盤を整えていることがわかった。飲酒行為は、このようにただ単に付き合いで飲んだり楽しむために飲むのではなく、アスリートは競技人生においてプラスになるようにあえて有効的に飲酒を活用出来ることも考えられる。

以上のことから、飲酒動機要因に、大学生トップアスリートと一般大学生、「褒美」というアスリートならではの飲酒動機が存在し、飲酒から得られる好影響と悪影響の双方が存在したが、飲酒行為をする前提として、「アスリートとしての自覚」が与える影響が非常に強く、飲酒と付き合っていると考えられた。

4. 結論

大学生トップアスリートにおける飲酒動機の原因として、「コミュニケーションを取るため」「高揚を求める」「付き合い」「酒が好き」「褒美」という要素が深く関係していることがわかった。そして、飲酒動機の原因に影響を与える要因として、「飲酒から得られるもの」「アスリートとしての自覚」「飲酒阻害要因」「対処」が飲酒行為に影響を与えていることがわかった。飲酒から生じるトップアスリートへの影響は、好影響と悪影響のどちらも存在しているが、トップアスリートは自分の立場を理解した上で飲酒と付き合っている。

5. 卒業論文の執筆を終えて

本論文の執筆にあたり、ご協力、ご指導、ご鞭撻いただいた多くの方々に改めて感謝いたします。特に、お忙しい中、至らない点が多い私に対しご指導をいただきました、水野基樹先任准教授に心から感謝を申し上げます。卒論の作成の際は多くの人にご迷惑をおかけしました。そして自身の卒業論文や部活動で忙しい中、急なお願いにも関わらず、インタビュー調査を快くご協力してくださった、順天堂大学の皆様、顧問の皆様深く感謝申し上げます。卒論作成により多くの経験を得ました。これからはこの経験を活かし社会人として誠実に生きていきます。